

【著作権について】

- ・著作権はすべて作者である梅井ゆえに帰属します。
 - ・ダウンロードした作品は無料で閲覧いただけます。
 - ・非公開で突破的に使用される場合のみ、連絡不要かつ無料でお使いいただけます。
 - ・右記以外で本作を使用したい場合は、使用料の有無にかかわらず梅井ゆえまでご連絡ください。(Mail:umeiyue54@gmail.com)
 - ・使用方法・料金等の詳細は、梅井ゆえウェブサイト (<https://script.umeiyue.website>) のガイドラインをご覧ください。
-

「光る魔物」

梅井ゆえ

【登場人物】

- ・ペト・・・（ラテン語で「求める」）旅人。三十歳前後。粗野な振る舞い。光があつた国の生まれ。
- ・ルーナ・・・（ラテン語で「月」）体が青白く光る怪物。

時代、場所不明。

丘の上にある小屋。季節は、夏。凄まじい嵐の夜。激しい雨、風、雷の音。

ペトが激しい暴風雨の中、茫然自失としながら、ただ歩いている。

ペト 「……白い……。光……。そうだ、旅をしているんだった。

酷い嵐の中、アタシはただひたすらに脚を動かしていた。ふと顔を上げると、草原の端に、雷光に照らされて一軒の小屋が見えた。有難い。アタシには、その小屋が灯台のよう

うに光って見えた。」

ペト 「……はあ……はあはあ……。」

ペトが、小屋の戸を叩く。

ペト 「あの！ごめんくだせえ！」

小屋の中からの反応はない。

ペト、嵐の音に負けじと声を張り上げる。

ペト 「夜分遅くに失礼！旅の者だ！嵐が去るまで、泊めていただけねえかい！」

けれど、反応はない。

ペト、少し考えて、扉に手をかける。

ペト 「開いた……。お邪魔します。」

小屋の中には、明かりがない。

ペト 「お邪魔します！……空き家か。ありがてえ、使わせてもらおう。」

濡れた衣類を脱ぎ、ランタンに火を灯す。

部屋の中央に暖炉を見つけ、火を入れる。

ペト、濡れた物を乾かそうと暖炉の周りに並べ、自身も暖を取る。

ペト 「はあ……。」

外から嵐の音が聞こえる。小屋もガタガタと揺れる。

と、突然奥の部屋から物音が聞こえてくる。

ペト 「うわあ！ご、ごめんよ！勝手に上がっちゃって！声は掛けたんだが、雨風の音でかき消されてしまったらしいもんで……。あの……。……って、奥の部屋からだったよな？

気のせいかな？」

ペト、気のせいだったのではないかと、音のした方へにじり寄る。

ルーナ「止まれ。」

ペト「わ！ごめんよ！人がいるとは思わねえで！」

ルーナ「……驚かしてしまつて申し訳ない。……遠慮せずゆっくりしていくといい。」

ペト「……本当かい……？」

ルーナ「ええ。こんな脆い犬小屋同然のところだよければ。」

ペト「そんなそんな、屋根と壁があるだけでも有難いことだよ。本当に恩に切る。」

ルーナ「大変だったでしょう。そちらの部屋の物はなんでも使つていただいて結構です。顔も知らない者同士、お互い無礼講ということ。」

ペト「そうかい。ありがとうよ。」

ペト、暖炉で暖を取る。

静かさに耐えかねて、扉越しにルーナへ語り掛ける。

ペト「あんたさん、そっちの部屋は寒くないかい？一緒にこっちで喋らないか？」

ルーナ「私は、濡れていないから。一人で使つてください。」

ペト「そうかい。……あ、ちなみに、お名前は？」

ルーナ「そんな、ただの羊飼いです。」

ペト「へえ、羊か。けっこうな数を育ててるのかい？」

ルーナ「一人で育てるには多い数を。でも、この嵐でどうなっているか……。」

ペト「大変だねえ。」

ルーナ「そういうアナタは、どうしてこんな山奥に？」

ペト「たまたまさ。アタシや、巷では名の知れた旅芸人でね、ペトって者だ。話を聞かせるのが仕事さ。自由気ままに、のらりくらり、珍しい話を運んでる。嘶師って言つても、ゼロから話を丁稚上げるわけじゃあない。ある町で聞いた面白い話を別の町で話して、今度はその町で聞いた面白い話をまた違う町で話すって具合だ。」

ルーナ「伝承を運ぶ旅芸人か。」

ペト「お、いいね！その謳い文句。今度から口上に使わせてもらうよ。」

ルーナ「光栄だよ。」

ペト「……つてなわけで、ここいらで面白い話つてないかい。」

ルーナ「おだてたね。」

ペト「ははは。許しておくんなよ。どうせこの嵐じゃあ、朝になつても止んでるかどうか。雷の数だけ話をしようじゃないの。」

ルーナ「調子がいいね。……何かって言われても。旅芸人さん、まずはお手本を聞かせてくれよ。」

ペト「もちろんだよ。助けてもらったお礼だ。アタシのとおつてお話を話して聞かせるよ。」

ペトが語り始める。

ペト

「昔々、まぶしいほどに光り輝く国があった。その輝きは、まるで国全体が暖炉の火の中心にあるみたいだった。国を万遍なく照らす光は、空から降り注いでいた。国の中心、王宮の遥かかなた上空に、その光の始発点はあった。

ある時、光の届かない遠い国から旅人がやってきた。旅人は輝きの国のまぶしさにひどく驚いた。空は見たこともないほど透き通った水色で、街にある建物や住人の衣服、目、髪の毛の一房、そこらへんに転がっている石ころの一つでさえ白く光り、目にするすべてが宝石のように思えた。

旅人はこの国にある物がどうしても欲しくなった。「光のない国にこの国の輝く物を持ち帰ったら、大儲けできる。」そう思ったからだ。最初は小石や首飾りなどの小さなもの、次に衣服や壺などの少し大きい物を、その次にさらに大きい動物や乗り物を、今度はもっともっと大きい一軒家なんかを丸ごと、輝きの国から持ち出した。けれど、どんなものも輝きの国から遠く離れてしまうと、そのまぶしさを失ってしまう。そんな挫折を繰り返すうち、旅人の心にひとつ、黒いモノが花開いた。『あの光じゃなきゃダメなんだ。あの光が、国や人を輝かせている。あの光がほしい。あの、王宮の上で燦然と輝く光。あれさえ手に入れば、富はおろか国だって手に入る。』旅人は衝動のままに、空飛ぶカラクリに飛び乗った。

旅人を乗せたカラクリは、真っ直ぐに光の源へ登っていく。王宮の屋根、渡り鳥、雲を超えて、下界からはもう光と旅人の区別がつかなくなったところで、旅人は銃を構えた。ダン、ダンッ！……銃声と一瞬の静寂が響いた後、旅人は体をつんざかれるような悲鳴と風に打たれた。その衝撃で旅人はカラクリもろとも真っ逆さまに下へ下へと落ちていった。

しばらくして、旅人は気を取り戻した。生きていた。周りは真っ暗闇。しかし、自分の近くだけ少し明るいことに気が付いた。『やった、光を手に入れた！』そう思って、自分の手に視線を落とした時、もう一つのこと気が付いた。見たこともないくらい大きな手、光り輝く手。旅人はもう、人間ではなくなっていた。まぶしいまぶしい光る魔物になっ

ルーナ

「……陽気な話をなさるかと思ったら、寓話ですか。」

ペト

「神話だよ、アタシの国の。暖炉の火を眺めながら聞くには、ピッタリな話だろ。」

ルーナ

「たしかにそうかもしれない。」

ペト

「それに、これは私が一番最初に覚えた話で、一番好きな話なんだ……。」

ルーナ

「光を失ったこの世界で『まぶしい』なんて言葉が出てくるのは神話とおとぎ話の中だけさ。アタシは、その『まぶしい』って感覚を知りたくて、旅を続けている。アタシの国では、この世の光は、その光る魔物に全部食われてしまったんだと。」

ルーナ

「光る、魔物ね……。」

ペト

「光る魔物は、光を食べつくした今の世界では、いったい何を食べてるんだろうな。」

ルーナ

「暖炉の火とか……?」

ペト

「それは火傷するんじゃないか?」

ルーナ

「ふふふ、冗談だよ。思い出したんだが、このあたりでも光る魔物についての話がある。」

ペト 「本当かい！こんな遠くでも、故郷との繋がりを感じられるとは嬉しいね。国を出てからこれまで似通った話には出会えてないからさ！」

ルーナ 「……へえ、そうですか。」

ペト 「なんだ、緊張してるのか？」

ルーナ 「嘶の前に、いくらか約束してくれませんか。」

ペト 「ああ、もちろんさ！」

ルーナ 「私がいる隣の部屋には、入って来ないでください。こちらの部屋はちよつと人に見せられるような有様ではないですから。あと、もう一つ、私の話が終わるまで、暖炉の火から目を離さないでください。」

ペト 「あいともさ。何か仕掛けのある話だね？ 楽しみだ。……。」

ルーナが語り始める。

ルーナ 「これは、友人の羊飼いかから聞いた話です。友人は、十数頭の羊と犬を二匹飼っていた。金のある方ではありませんでしたが、それでも山に一つ小屋を持っていた。

ちようど夏も盛りになった頃、羊が二頭、減っていることに気が付いた。羊を囲む柵は自分一人で作った拙いものだったから、『柵を飛び越えたのだろう』とあまり不思議には思わなかった。

次の日、羊飼いは柵を直した。ただ直しただけではなく、羊が飛び越えていけないよう、柵を前よりも少し高くした。その日の夜は、犬が煩かった。害獣が来たのだろう思ったが、羊飼いは疲れていたから、そのまま寝てしまった。

明くる日、外に出てみると、犬が一匹減っていた。羊飼いは、害獣の仕業だと確信して、『何か手を打たなくては』と思った。

その日、羊飼いは一晩中小屋の中から羊たちを見張ることにした。害獣は夜に来到ることを分かっていたからだ。羊飼いが見ていると、月もおぼろげな暗闇の中、草原の端の方にひと塊の青白い光が現れた。その光は、みるみるうちに大きくなっていき、小屋はひどくまぶしい光に包まれた。羊飼いが辛うじて薄目を開けると、大きな光る魔物がサツと羊を攫って行くのが見えた。

羊飼いは、光が消えるまで、身動きが取れなかった。魔物と目が合った気がしたから。

『不気味だ。夜が明けたら、羊を連れて山を下りよう。』

羊飼いは、そういつて自分を落ちつけながら、朝を待った。

しかし、次の日は嵐だった。凄まじい暴風雨で、とても羊たちを連れて山を下りられる状況ではなかった。

『しかたない、今日はやめておこう。』

そうつぶやいて、夜まで過ごしていると、嵐の難を逃れようと旅人が訪ねて来た。その旅人は、闇に溶け込むような真っ黒な衣に身を隠していたので、少々驚きながらも、心優しい羊飼いは快く旅人を小屋へ迎え入れた。旅人に乾いたタオルや暖炉の火などを恵み、その夜は二人で談笑して過ごした。ただ、旅人が頑なに水にぬれた真っ黒な外套を脱がず、素顔も見せてくれないことが少し気にかかったが、疲れのためか、それとも旅人のする異国の話が多たらす高揚感からか、すぐに眠ってしまった。

空を飛ぶような心地よい夢を見た後、白っぽい光を感じて、羊飼いは目を覚ました。だんだんと目が冴えてくると、光の正体は小屋の中、自分の後ろから来ていると気づいた。黒い外套が宙を舞い、羊飼いが『あっ!』と思った時にはすでに遅い。羊飼いが旅人だと思っていた者は、昨日見た光る魔物だったのです。それから後、この小屋にはその光る魔物が住み着いているという噂です。おしまい。」

ペト、自身の置かれた状況に気が付く。

ペト 「……。」

ルーナ 「どうでしたか？」

ペト 「ど、どうって？あ、ああ、アンタさんはあれだねえ、話すのが達者だねえ。」

ルーナ 「本職の御仁に褒められるとは、光栄です。」

ペト 「にしても、その羊飼いは大層呑気なお人だね。」

ルーナ 「そうだねえ。」

ペト 「アタシだったら……ああ、嵐だろうがさっさと逃げちまうだろうよ。」

ルーナ 「逃げるのかい？」

ペト 「へえ!……あ!ああ、そうだねえ……どうするかねえ……。」

ルーナ 「……。」

逃げようとして扉を開け朗とするが、開かない。

ペト 「この小屋は、あれかい？結構古いのかい？」

ルーナの反応はない。ペトは、必死に扉を開けようとする。

ペト 「建付けが随分悪くなってるみてえだよ。……。」

突如、暖炉の火が消える。

ペト 「あれ?……。あの、おまえさん？」

扉が開き、激しい風が入ってくる音。

ペト 「え……?まぶしい……。」

外套がバサツと舞う。

後には、激しい風雨の音だけが残る。

【著作権について】

- ・著作権はすべて作者である梅井ゆえに帰属します。
- ・ダウンロードした作品は無料で閲覧いただけます。
- ・非公開で突破的に使用される場合のみ、連絡不要かつ無料でお使いいただけます。
- ・右記以外で本作を使用されたい場合は、使用料の有無にかかわらず梅井ゆえまでご連絡ください。(Mail:umeiyue54@gmail.com)
- ・使用方法・料金等の詳細は、梅井ゆえウェブサイト (<https://script.umeiyue.website>) のガイドラインをご覧ください。